

翌十五日、わたしたちは二十五丁目にある元造兵廠の建物へ向かうことにした。ピートは「ニューヨーク・デイリー・ニューズ」紙に、十一、十二日と続けてコラムを書き、それらい明十六日の日曜版に掲載される六十頁の特集用の解説を執筆していた。長文の解説記事が終わったので、ふたりで出かけようということになったのである。わたしたちはキャナル・ストリートの検問を越え、前日から一部運転を再開した地下鉄のレキシントン・ラインに乗って、二十三丁目駅に降り立った。二十五丁目には、かつて造兵廠だった堅固な建物があり、行方不明になった家族を探す人々のセンターになっていた。家族を探す人びとはこのセンターで、DNA鑑定に必要な材料を提供しているという。

四日前のあの日のように、抜けるようなブルーの空が広がっていた。地下鉄の駅を出ると建物の壁や通りに、「ミッシング・パーソン」と書かれた尋ね人のポスターが貼ってあった。

「ミッシング・パーソン 火曜日より

ヴァデイミア・サヴィンキン

WTC一〇一階

六フィート二インチ

百八十ポンド

明るい茶色の髪

ベージュのズボンにアイボリーのシャツ、茶色の靴

右手に金のブレスレット、左手に時計」

ポスターにはロシア系の青年の写真があった。

元造兵廠の近くに来ると、尋ね人のポスターが建物の壁いちめんを飾り、電話ボックスや郵便ポストなど至るところに貼られている。近くには花とキャンドルが添えられ、多くの住民が集まってポスターを見つめていた。

「シタ・(ネルマラ)・スナリーン

WTC二号館九十七階、フィドゥシアリ投資銀行勤務

背丈 五フィート四インチ

体重 百三十ポンド

歳 三十七歳

目の色 明るい茶色

髪 暗茶色で少しウェーブ、中くらいの長さ

傷 左の腕に小児麻痺のワクチン接種跡

最後の姿は、黒いパンツスーツ、白いブラウス、黒いローファー
白い文字盤の銀製の古めかしい時計を左手にはめていた」

いかにもインド系らしい茶褐色の肌のシタが笑顔を向けている。

若い女性、ビジネスマンの青年、企業トップの壮年者……白人、黒人、ラテン系、アジア系、アラブ系、そして姓から察するにアイルランド系、スコットランド系、イタリア系、ユダヤ系、ロシア系、ポーランド系、ハンガリー系、韓国系など、ありとあらゆる人種の顔がある。わたしは改めて彼らの国籍が六十二カ国に及ぶことを思い出した。

なかには「ダディを見つけて」という言葉の下に、二歳くらいの男の子を抱いた若い父親の写真がある。そのダディは、一九七五年十月十二日生まれ、身長五フィート九インチ、体重百九十ポンド、黒髪、茶色の瞳、WTC一号館一〇二階、と記されていた。

アイルランド系のティモシー・オサリバンは、六フィート七インチの長身で、象の隣に並んでいる写真が貼ってある。ロバート・サトクリフ・ジュニア（三十九歳）は、WTC一号館一〇七階のレストラン「ウインドウズ・オン・ザ・ワールド」でブローカーの会議に出席していた。消防士のショーン・パトリック・タロンのポスターには、消防服を身につけた彼の写真の下に、「ショーン、あなたを誇りに思う！」と手書きの文字が見えた。

あの日、ベッシー・ストリートから両タワーを見上げていたわたしは、あそこ
に閉じ込められた人たちが、どれほどわたしの立っているこの地面へ降りることを切望しているかと思ひ、彼らの恐怖と絶望に思いを寄せていた。十二日付の新聞は、鈴なりになって窓から身を乗り出す人びとを望遠レンズが捕えた写真を載せていた。そして、いま、その人たちの顔が、初めて目の前に現れたのである。どこかで擦れ違っていたかもしれない、どこかで会ったような顔、顔、顔。

*標的だとわかっていた

ピートがあるポスターを指差した。KEIJI TAKAHASHIという名前があり、FUJI BANK 勤務、WTC二号館八十階と記されていた。百七十センチ、八十キロ、黒枠の眼鏡。黒いシャツを着て眼鏡をかけ少し上を見上げた氏の顔写真もあった。四十代と思われる柔和な顔つきである。

その時、メモしているわたしの肩を叩く人がいた。振り返ってみると、小柄なアジア系の女性が立っていた。

「わたし、彼の知り合いです……」

英語でこう話しかけてきた。わたしは思わず見ず知らずの彼女の手を握り締め、どうやって知り合ったのですか、と英語で尋ねた。

「彼はわたしの会社のボスなのです」

とつさに彼女が日本人であることを察したわたしは、日本語で話しかけた。

「……それで、どこの会社ですか」

「みずほキャピタル・マーケッツです」

「あそこには富士銀行とあるけれど……」

「彼は本社の富士銀行から来ている駐在員で、みずほのチーフなのです」

その彼女自身もあの朝、二号館八十階のオフィスに出勤しようとしていた。しかし、初めの爆発を見てすぐ避難したという。みんな朝何時に出勤するのですかと尋ねると、

「シフトがあるのでそれぞれですが、トレーダーは朝八時くらいに出勤します。

トップは早くから来るので、トップの四人が行方不明なのです」

と答えた。

その四人が百四十名（発表では百二十五名）の従業員の誘導に当たったので、何人もの人が彼らに助けられたと語っている、という。

「トイレに入っていた同僚の女性は、早く逃げろと言って、扉をどんどん叩く高橋さんの声に促され、階段を下りて助かったのです」

こんな非常事態が起こるなど、トレード・センターで働く人たちは予想もしていなかったのですか、と聞いてみた。

「ドリル（非常訓練）は定期的に行っていたのです。マスクや水、応急手当のセットなどが入った赤いポーチを、全員、椅子の横に取り付けていました。高橋さんもわたしの同僚にこれを持って行けと渡したそうです。彼は確か十五年ほど前から来ていますから、一九九三年（の爆破事件）にもいたはず……。あの時は、ランチに出ていたのだと思います。（あの事件の後からは）何か怪しいことがあったらすぐ連絡するよう、ポート・オーソリティが指令を出していました。……標的になっているビルで働いていることは、わかっていたのです」

それまでの四日間、目の前で起こった大惨事に衝撃を受けたわたしは、腹の底から煮え繰り返るような怒りと緊張、極度の興奮のなかで過ごしてきた。いま、行方不明になった人たちの写真をひとつひとつ見ているうち、張り詰めていたものが大きく揺さぶられ、激しい悲しみとなり、涙とともに噴出してきた。こんなことはあつてはならない。

乗っ取られた飛行機の乗客や搭乗員、パイロット、タワー内部で他の人たちの誘導に当たって逃げ遅れた人たち、煙のなかにライトを照らし、救出に全力を尽くした消防士や警察官。並んだ写真は、それぞれの人びとの、それぞれのドラマを語りかけてくるようだった。彼らの平穏な日常は永遠に失われた。わたしたち

は明確な敵の見えない、複雑に入り組んだ恐ろしく残虐で難しい戦争に突入したのである。

*クリントンの後悔

元造兵廠のあるレキシントン・アベニュー二十五丁目界隈は、「リトル・インディア」と呼ばれるくらいインドやパキスタンのレストラン、雑貨店、食料品店が並ぶ地域である。ターバンを巻いた運転手さんが増えたのは、数年前からのことだろうか。彼らは夜になるとこのあたりにイエロー・キャブを駐車させ、安くて美味しい郷土料理を振舞うレストランに集まる。通りかかった二十六丁目の角には「バーミアン」というレストランがあつて、固く扉を閉ざしていた。よく見ると、「アフガニスタン料理」という入り口扉の英文文字に、星条旗を貼り付けていた。この様子だとアフガニスタン・レストランは客足も減ってさぞかし困っていることだろう。

パーク・アベニュー方向へ歩いていくと、どこかの要人がガードマン付きの大型バンに乗り込んで帰ったところだった。防弾ガラスの黒窓のなかに、誰がいたのかわからなかったので近くの警官に聞いてみると、ビル・クリントンだという。オーストラリアの旅から帰った前大統領は、毎日、ニューヨーク市内へ来ている様子である。郊外ウエストチェスター郡チャパクアの自宅では、いても立ってもいられない気分なのだろう。

オサマ・ビンラディンの名前が米国のメディアで初めて大きく報道されるようになったのは、一九九八年八月七日に起こったケニアとタンザニアのアメリカ大使館爆破事件のことだった。FBIは大使館爆破事件の首謀者が、このサウジアラビア出身の大富豪だと発表。ターバンを巻き髭を伸ばした長身瘦躯のいかにも気高い風貌をしたビンラディンが、米国のテレビを頻繁に飾るようになったが、わたしはどうもその報道にうさん臭いものを感じていた。

かつて「悪の帝国」とロナルド・レーガン大統領が呼んだソ連が崩壊し、サダム・フセインも大きな「悪事」を働けなくなったので、米国は新たな「敵」を探しているのではないかと勘ぐったのである。オサマ・ビンラディンこそ新しい「敵」にぴったりの条件を備えているのではないか。

そのうえ不可解なことに、このビンラディンは西側メディアのインタビューに答えるのが好きらしい。ABC放送の知り合いの記者ジョン・ミラーがインタビューに成功した後、CNNも英国のBBCもアフガニスタン奥地の秘密の隠れ家へこの指導者を訪ねている。

十三日、現場近くを訪れたクリントンは、ビンラディンを仕留めるチャンスを逃したことがあった、とデイリー・ニューズの記者へ語っていた。

「あと一步だった。一九九八年（ケニアとタンザニアの米大使館同時爆破事件の後）にアフガニスタンにある彼の訓練キャンプを空爆した時のことだ。ほんの数時間、あるいは一時間の差でビンラディンを逃してしまった。彼はあのキャンプで十一日の火曜日に行われたようなテロの訓練を指導していたのだ。それ以降、一連の事件を振り返ってみて、彼のテロ活動が世界に及んでいることを確認した。知らされていた以上の事件をみつけた。その後はいくつかのテロ活動を防ぐことができたが……」

確かに二〇〇〇年のミレニアムが幕を開ける時、カナダから入国してシアトルを爆破しようとしたテロリスト容疑者が逮捕されている。

クリントンは彼の政権の八年間に、この危険なイスラム急進派に手が下せなかったことをいま悔いているのだろうか。ケニアとタンザニアの米大使館同時爆破事件が起こった一九九八年八月当時、米国はモニカ・ルインスキー事件の成り行きに釘付けにされていた。

ルインスキーが大陪審で証言したのが、八月六日。米国時間の二日後にケニアとタンザニアの事件が起こったが、アメリカ人の関心はもっぱら大統領のセックス・スキヤンダルに向けられ、外国で起こったこの事件の重要性など、ほとんど無視されたといってもよい。クリントンが歴代大統領として初めて大陪審で証言をしたのが、八月十七日。米大使館同時テロの報復としてアフガニスタン（訓練キャンプ）とスーダンへ巡航ミサイルによる攻撃が行われたのが八月二十一日である。四日後には南アフリカ・ケープタウンの「ハリウッド・プラネット」レストランで爆弾が破裂、アフガニスタンとスーダンへの爆撃に対する報復だと伝えられた。

九月三日には、ニューヨーク発ジュネーブ行きのスイス航空便が、ノバ・スコシア上空で爆発、二百二十九名が死亡した。アメリカ人はそれでも身近に迫ったテロの脅威に気付かず、弾劾投票へ向かって動き出したスキヤンダルばかりに目を奪われていた。

クリントン政権が任期三カ月を残した昨年十月十二日、イエメンのアデン港に停泊していた米駆逐艦コールが、グラスファイバー製ボートに乗ったテロリストによって、船腹に十二メートル四方の大穴が開けられるほど爆破されたが、クリントンはこれを防ぐことはできなかった。オサマ・ビンラディンの犯行が伝えられ、再び、長身瘦躯のターバン姿の指導者がテレビを飾ったのである。

一九九六年、ビンラディンはイスラム教徒に呼びかける宗教令ファトワーを出し、「サウジアラビアの米軍部隊を殺せ」と命令していた。二年後のファトワーではアメリカ市民への無差別テロを呼びかけるようになったという。

クリントンは同時多発テロを招いた責任の一端を感じているのだろうか。オサマ・ビンラディンを含むイスラム急進派に正面から立ち向かいたかったクリント

ンの意向を、スター独立検察官の執拗な追及が踏み倒したと主張したいのだろうか。あるいは、若い研修生の誘惑に負け、彼女と関係してしまった自分の過ちが、ひいてはこの大惨事を防げない状況を作ってしまったと責任を感じ、後悔しているのだろうか。

*六〇年代のほのかな匂い

パーク・アベニューを下り十四丁目のユニオン・スクエア・パークへ近づくと、ギターの調べとともにボブ・ディランの歌が聞こえてきた。小さな公園には馬にまたがるジョージ・ワシントンの銅像が建っている。四日前まではワールド・トレード・センターの二本のタワーが南西の空を塞ぐように立ちはだかつていた。ワシントンはその南の方向に向かって右手を上げ、進軍を叫んでいるかのように見える。銅像には火を噴く南北タワーの大きな写真が掲げられ、その下に誰が描いたのだろう、LOVE LOVE LOVEという文字が台座一面を覆っていた。

この公園はロンドンの「ハイド・パーク」のように、市民が自分たちの意見を発表する場所で、ベトナム戦争の時代には反戦を叫ぶ若者でいっぱいだった。

いま、その公園の南西角にある地下鉄のユニオン・スクエア駅の入り口や壁にも、ミッシング・パーソンのポスターが至るところに貼ってあった。公園内の大木にもフェンスにもあらゆる人種の顔が、それぞれの最期のドラマを物語るかのように、写真のなかで微笑み、あるいは取り澄ましている。芝生には生花のバラや百合などを手向けて作られた祭壇があり、キャンドルが灯され、たくさんのメッセージが寄せられている。

「われわれは勝利する」

なかにはメキシコの聖母マリア像であるグアダルーペが飾ってあったり、花で作られた星条旗が芝生に置かれている。グアダルーペ像はベトナム戦争時にはなかった。この街にメキシコ系移民が増えた証拠である。トレード・センター一号館の百七階にあるレストラン「ウインドウズ・オン・ザ・ワールド」では数十名のメキシコ人がキッチンで働いていた。彼らもちろん行方不明である。

「われわれは犠牲者を吊い、平和のために立ち上がる」

「これ以上、罪なき市民の命を奪うな」

花を供え、キャンドルを灯し、メッセージを書いている多くは、若い人びとである。鼻やへそにピアスをした若者や昔のヒッピーふうの長髪の青年たちである。地上軍派遣が始まれば、アフガニスタンの奥地などへ送られるのは彼ら若者の世代であることは間違いない。

米国は現在、各地に散らばったイスラム急進派テロリストを撲滅してくれる英雄を求めている。しかし、本当の英雄はアーノルド・シュワルツェネッガーやシ

ルベスター・スタローン、ブルース・ウィリスではなく、爆破されたタワーで救出に当たった消防士や警官であり、乗っ取られたユナイテッド航空九三便の機内で、犯人と闘った市民であることを若者は理解した。標高四千メートルにも及ぶ山岳地帯でのゲリラとの戦いがどれほどのものであるか、ペストやコレラ、赤痢、マラリアなどが蔓延する砂漠化した土地での戦闘がどんなものになるか、彼らは悟ったのである。

この若者たちは「湾岸戦争」の時代に小学校へ通い、クリントンの好景気の八一年間に物心がついた世代である。ベトナム戦争は教科書で習う昔の戦争であり、第二次大戦は『プライベート・ライアン』『シンドラーのリスト』そして『パール・ハーバー』などの映画の出来事である。

しかし、その若者たちがわれわれの世代と同様、LOVEという文字を描き、ピースサインを掲げ、まるで六〇、七〇年代のヒッピーやフラワーチルドレンを彷彿とさせるのである。あの時代、われわれ戦後生まれの世代は、ベトナム反戦を叫び、学生運動を起こし、公民権運動に立ち上がった。ボブ・ディランやジョン・バエズの歌を口ずさみ、ジミ・ヘンドリクスやジャニス・ジョップリンのロックに身をゆだね、ウッドストックに参加した。親や先生、警官や政府など大人の世界に反抗し、あらゆる若者文化を花開かせた時代だった。

わたしはそんな米国が好きでこの国に住みたいと思うようになった。しかし、ようやく住み着いた一九八四年の米国は、ハリウッドの俳優だった大統領を戴くまるで別の国だった。若者はジョギングや禁煙、健康食品などヘルシー志向に走り、助け合いや連帯などという言葉などなくなつたかのように、金儲けだけを生きがいとするヤッピー世代が横行していた。

ユニオン・スクエア・パークの若者を見てみると、新しい戦争というおぞましい現実のなかから、思いがけない萌芽を見る思いだった。この国に住んでから初めて六〇年代のほのかな匂いを嗅いだのである。そして、また戦争が始まる。標高四千メートルもある山間地でのゲリラ戦という恐ろしい戦争が……。

地下鉄に乗ってアパートへ帰る途中、わたしは思い切つてピートにひとつの約束をしてくれるように頼んだ。

「戦争が始まっても、戦地に行かない、と約束してくれる？」

「……パキスタンあたりへ行くなんてことになるかもしれないね」

わたしはここで長い間考えていた切り札を差し出した。

「そんなことを言つても、あの時、走れなかったじゃないの」

タワーが崩壊し頭上に降りかかってきたあの時のことを蒸し返したのだった。

彼はちよつと考えてからこう答えた。

「それもそうだな。六十歳すぎの新聞記者に戦地へ行けとは頼んでこないだろう」
もし、六十六歳のコラムニストが戦地へ派遣されることになったら、わたしも

ついて行くしかない。手を引いて走り、蹴っ飛ばして穴に伏せさせ……まあ、そんなことにはならないだろうが。わたしは砂漠化した荒地に思いを馳せるのだった。